

フランス語フランス文学

◇教員◇

教授：塚本昌則、塩塚秀一郎、王寺賢太

助教：浜永和希

◇学生◇

学部：22名、修士課程：11名、博士課程：18名

(1) 仏文研究室はどんなところか

フランス語をキー言語として、文学的テクストを読み解く力を養うべく切磋琢磨しあう者たちの集う場所。それがフランス語フランス文学研究室、略して仏文研究室である。

わが国ではこれまで、フランス文学は世界の文学の中でも特別の位置を占めるものとして熱心な受容の対象となってきた。泥棒詩人ヴィヨンの詩やラブレーの破天荒な『ガルガンチュア』から、バルザックやブルーストによる偉大なる小説の探求、ボードレーやランボーによる尖鋭的な詩の冒険。そしてシュルレアリスムから実存主義、構造主義に及ぶ、さまざまな思考の展開に至るまで、フランス文学の歩みは私たちに惹きつけてやまない刺激的局面に満ちている。その魅力と真に触れあうためには、フランス語の原書をひもとく以外に道はない。原典のページを開き、辞書を頼りにひたすら読み進める。それは異国の言語のただなかをさすらう旅への出発にほかならない。仏文研究室では、その旅に必要な知力、体力をはぐくむためのトレーニングが多様な形でほどこされる。

同時にまた、仏文研究室が根本的にきわめて自由で、学生がそれぞれの道を進むがままに任せる寛容の精神を旨とする場所であることも強調しておこう。ラブレーが『ガルガンチュア』中で描き出した理想境である、テレームの僧院を律する規則「汝の欲するところをなせ」は、そのまま仏文のモットーである。小林秀雄や太宰治、大江健三郎を始めとして、これまで東大仏文がおびただしい数の文学者、著述家、そして芸術家を生み出してきた背景には、そうした不羈独立を尊ぶ精神的土壌がある。その伝統はいまも脈々と受け継がれている。

もちろん、教員側はただ放任をこととするのではなく、学生からの質問

や相談に喜んで応じ、学生との対話を何よりも大切に考えている。また仏文研究室は修士・博士課程の学生を多く有する。彼らは先輩として気さくにアドバイスを与えてくれることだろう。

(2) 仏文ではどのような授業がなされているのか

講義、演習ともに仏文の授業の基本は「訳読」である。読んで訳すという語学習得のスタイルは今日、不当な蔑視にさらされている。だが、初級文法の知識を実践の場に活かしつつ、日常会話のレベルを超えた複雑で豊かな意味を含みもつ文章をじっくりと読み解くために、そして自らの理解度を確認しつつ進んでいくためには、訳読ほど頼りになるメソッドは存在しない。冠詞ひとつおろそかにせず、時制や法に十分注意しながら自分の読み取ったところを日本語に移してみることで、いったい自分には原文がどこまで読めているのか、そしてどのような点に理解の不足があったのかがはっきりする。そうやって講義は、各自の準備してきた解釈と教師の解釈とが時にはしのぎを削り、照射しあう場となる。フランス語という異国語で書かれたテキストの「正体」を、ともに力を尽くして明らかにしていくことが、仏文の授業の醍醐味である。

もちろん、訳読だけで十分だというのでは毛頭ない。フランス語を聞き、話し、そして書く練習もまたたつぷりと積む必要がある。仏文では現在、フランス人教師による授業を週 2 回開講しており、実践的なフランス語力をいくらでも伸ばしていけるだけの環境が整っている。

2008 年度からジュネーヴ大学への、そして 2018 年度からはさらにパリ第 8 大学への留学生派遣制度が設けられたことも特筆しておこう。毎年、学部ないし大学院の学生を派遣し、一流の教授陣の講義・ゼミに出席してフランス語の習得に励むと同時に、文学研究の基礎的知識・方法論を学んでもらう。有意義な留学生生活を満喫した後の進路は、大学院で研究を続けたり、社会に出て活躍したりとさまざまである。留学を希望する学生は、フランス語力に研きをかける必要があることはもちろん、留学事情について自分で情報を収集したり、経験のある先輩方に話を聞くなどの準備を進めたりする必要もある。全学交換留学に制度が変わったことにより、フランスのストラスブール大学、グルノーブル・アルプ大学への語学研修留学が可能となったことも付言しておく。

また、仏文研究室は世界のフランス文学研究者や作家、批評家がひんば

んに訪れる、国際的な交流拠点の一つであり、いわば東京にいながらにしてソルボンヌの講義に連なる気分を味わうような機会に事欠かない。近年では、ノーベル賞作家ル・クレジオを招いての講演会や、小説家ジャン＝フィリップ・トゥーサンを招いての討論会が開催され、広く話題を呼んだ。

(3) 教員の専門と授業

ここで仏文科の教員をご紹介します。現在、専任教員は3名である。

塚本昌則教授の専門は、ポール・ヴァレリーを中心とする20世紀文学。とりわけヴァレリーにおける眠りと夢の主題に着目し、研究している。この視点を20世紀フランス文学全体に押し広げ、『目覚めたまま見る夢——20世紀フランス文学序説』（岩波書店）という研究にまとめている。また20世紀文学を再検討する研究プロジェクトを推進しており、共編著『声と文学——横断する身体の誘惑』（平凡社）等にその成果をまとめている。さらにクレオール文学を中心とする現代フランス文学の翻訳にも取り組み、ラファエル・コンフィアン『コーヒーの水』、シャモワゾー『カリブ海偽典』（いずれも紀伊国屋書店）等の訳書がある。近年の演習・講読では、ボードレー、ランボー、ボヌフォワ等の詩、フロベールの小説などの19世紀文学、ヴァレリー、プルースト、ブルトン、レリスなどの20世紀文学、セゼールの詩などのクレオール文学の講読をおこなっている。

王寺賢太教授は、モンテスキュー、ルソー、ディドロなど18世紀フランスの哲学者の政治・経済・歴史思想が専門。そのかたわらアルチュセールやフーコー以下、20世紀の哲学者たちの仕事にも旺盛な関心を示してきた。現在、Guillaume-Thomas Raynal, *Histoire philosophique et politique des Européens dans les deux Indes* (Centre international d'étude du XVIII^e siècle) の批評校訂版共同編集責任者。著書に『消え去る立法者 フランス啓蒙における政治と歴史』（名古屋大学出版会）。著編著に日本の「近代の超克論」を再検討する *Éprouver l'universel. Essai de géophilosophie* (Kimé、共著) や、「68年の思想」の意義を説く『現代思想と政治—資本主義・精神分析・哲学』（平凡社、共編）など。講義では、上記の18世紀と20世紀の作家・思想家を中心に、＜考えること＞と＜書くこと＞・＜読むこと＞の関係に焦点をあわせて講義を行っている。

塩塚秀一郎教授の専門は、ジョルジュ・ペレックなどウリポ作家を中心とする近現代文学。著書に『ジョルジュ・ペレック 制約と実存』（中央公

論新社)、『レーモン・クノー 〈与太郎〉的叡智』(白水社)、『逸脱のフランス文学史 ウリポのプリズムから世界を見る』(書肆侃侃房)、クノーにおける〈知〉の概念を検討した仏文著書 *Les Recherches de Raymond Queneau sur les fous littéraires. L'Encyclopédie des sciences inexactes* (Eurédit) がある。近年はフランソワ・ボン等の近現代作家について、都市の日常、プロジェクト・アート、歩行などのテーマを設定して研究している。また、E の文字を使わずに書かれたフランス語原文を〈い段〉抜き日本語に翻訳したペレック『煙滅』(水声社)のほか、クノー『あなたまかせのお話』(国書刊行会)などの訳書がある。近年の演習・講義では、レリス、ゾラ、ポンジュ、ヴェルヌ、ネルヴァルなどの原書講読のほか、アトリエ・デクリチュール(文章教室)の実践を行っている。

フランス語学フランス文学の研究対象は多岐にわたるため、専任教員だけではとてもカバーしきれない領域が残る。そうした領域については、毎年学外から専門家の方々を非常勤講師として招き、その研究成果をご披露いただいている。今年度は、高名康文講師(成城大学・中世文学)、畑浩一郎講師(聖心女子大学・19世紀小説)、鈴木和彦講師(明治学院大学・近代詩)、廣瀬純講師(龍谷大学・映画批評)、木島愛講師(千葉工業大学・言語学)に出講をお願いしている。それぞれの専門を活かした講義では、フランス語学および近代詩、シュルレアリスムの専門的研究を通じて、幅広い専門分野を学ぶことが可能である。

フランス文学は時代順にいつて武勲詩・聖杯伝説などの中世文学、人文主義、古典主義、啓蒙主義、ロマン主義、自然主義、シュルレアリスム、実存主義という文芸思潮をたどり、しかもそのすべてにおいて時代の先端をゆく作品を産み出してきた。一国文学でありながらヨーロッパ世界の精神史の流れを先取り、ないしリードしたとってよく、これをたどることによって、副産物として、世界文学への展望を容易に把握することもできる。学部でその基本をまず学ぶことによって、複雑な様相を呈している現在の状況への認識をさらに深める道が切り開かれることだろう。

(4) 卒業後の進路

一般企業や金融関係、公務員、あるいは新聞・放送・出版、さらには図書館関係や教職など、多岐にわたっている。ただし教職に関しては、現状では高校段階まではフランス語担当で教職につくことはほとんどありえな

いため、在学中に英語、国語その他の教科単位を修得するものが多い。

また、学部2年間の学習では物足りないという諸君は、大学院修士課程に進学して研究を深めることをお勧めしている。大学院入学希望者は、本学以外からの志望者も含めて定員の約3~4倍程度。最近は、修士号を取得した上で就職する学生が増え、一般企業や、新聞・出版関係に就職している。なお、博士課程に進学すると将来はほぼ教育職研究職に限定され、その就職先は容易には見つからない。博士課程への進学に際しては、自分の適性と待ち構えている苦しい将来を考えあわせた上で、相当の覚悟をもって臨む必要がある。

なお就職状況に関して、詳しくは仏文研究室ホームページをご参照いただきたい。毎年、社会のさまざまな分野に人材を送り出していることがわかりいただけるだろう (<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/futsubun/career/>)。

(5) 最後に

仏文においてすべての基本となるのはフランス語力だが、これは地道に練習を重ねればだれでも等しく上達を望めるものである。努力さえ怠らなければ、ある時点で急に自分が「離陸」した実感を抱けるはずだ。聞き、理解する力さえあれば、インターネットを通して24時間フランス語に接することができる現在の環境を積極的に活用し、世界をどんどん広げてほしい。各自が自由に、のびのびと学ぶのが仏文研究室の伝統であることをもう一度、強調しておこう。臆せずその門をくぐっていただきたい。